

かたつむりの動く家

皆川美恵子

読みたいと思いつつも、日ごろの忙しさから
積まれてしまった本を取り出し、時間をかけて、
ゆつくりと読書できるのが、夏休みの欲びでなく
て何でしょうか。細切れの寄せ集めの時間ではな
くて、たっぷり時間があつることの素晴らしさ
は、読書でこそ満喫できます。さあ、夏休み、好
きな本を抱えて、どこかお気に入りの場所にこも
りましょう。

『かたつむりハウス』

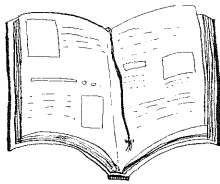
アラン・アルバーグ作 ジリアン・タイラー絵

岡田よしえ訳 評論社

絵本に、ゆかいな郵便屋さんシリーズというの
があります。自転車に乗った郵便さんが、おと
ぎ話の主人公たちに手紙を届けるという趣向です
が、クリスマスの巻は、特に仕掛け絵本として素

晴らしく、友人・知人にプレゼントしたくなるような絵本です。イギリス人夫妻による作品ですが、絵描きであった夫人が亡くなったために、残念ながら、シリーズは終了してしまいました。

この絵本の、かたつむりの表紙の絵に惹きつけられ、作家名も発見して、すかさず買ったものの積んで置きました。さて、ゆつくりとページを繰って眺めていくと、動植物の絵も繊細で幻想的であり、おばあさんが即興で語るお話の世界が魔法のように鮮やかに彩られています。アランさんが、優れた才能を秘めた画家と出会えたことを



祝福せずにはいられなくなり、思わずうれしさがこみ上げてきました。

『ぼくとールピーの神様』

ヴィカス・スワロップ作 子安亜弥訳

ランダムハウス講談社

赤ちゃんポストのことが、日本でも話題となりだしています。イタリアではローマ法王の勅令により、一九八八年に始まる歴史があるとされています。キリスト教カトリック系の病院や養育施設に設置されている場合が多く、マザー・テレサも行っていたと聞きます。

ところで、この物語は、インドのニューデリー聖メアリー教会に出されていた古着の慈善箱に捨てられた赤ん坊が、主人公です。貧しい生活の中で学校にも行かずに生き抜き、十八歳になった

時、テレビのクイズ番組に出場して、高額の賞金を勝ち取るという話です。多くの難問をなぜ、スラムに住む無学な青年が解答できたのでしょうか。十三問の質問に対し、一つひとつの解答までに及ぶ経緯が、青年のこれまでの生い立ちの生活を描き出すという仕掛けとなっています。

すさまじいばかりの社会問題が渦巻いているインド社会において、家庭、学校とは無縁に生まれ落ちた子どもが、難問を次々と解答していく衝撃的なストーリーは、読みだしたら手放すことができないほどの迫力です。何が子どもを人間として教育し、知識・教養を身に付けさせることができただのでしょうか。その逆に、家庭とは何であり、学校とは何なのでしょう、と考えさせずにはおきません。

この青年は、賞金を獲得する段になって、ペテ

ン師の濡れ衣で陥れられそうになります。その青年を救済したのは、突如現れた謎の女性ですが、物語の所々に見え隠れする母性の影に、インドの母神信仰を見る思いがしてなりませんでした。

『小説 渋沢栄一』

津本 陽 幻冬舎文庫

お茶の水女子大学の附属幼稚園に大切に伝えられている青い目の人形、メアリーさんを調べる機会がありました。昭和二（一九二七）年三月三日の雛節句に間に合うようにアメリカから贈られてきた親善人形ですが、日本側の受け入れの中心になり、同年のクリスマスには、アメリカの子どもたちへ日本人形を答礼として贈ることに尽力したのが、渋沢栄一でした。

青い目の人形を手にした渋沢栄一の有名な写真

が残されていますが、その時洪沢は八十七歳でした。人形を通じて日米の子ども同士が交流する国際児童親善会のために奔走した洪沢栄一（天保十一（一八四〇）年～昭和六（一九三二）年）の人生は、どんなものであったのでしょうか。伝記

小説としての本書は、激動の幕末、明治、大正、昭和を生きた九十一年間の軌跡を描いており、興味尽きないおもしろさなのです。

埼玉県深谷、利根川が氾濫することが多い土地の農家に生まれた栄一は、父親が農業よりも藍の事業に力を注いだ結果、富裕な資産家の子どもとして成育します。この子どもが、農村でどのような教育を受け、やがて徳川慶喜に仕える武士になったのでしょうか。一八六七年、パリで開催された万国大博覧会に出かけることになるのですが、海外で何を学び取ってきたのでしょうか。

帰国してみると、明治新政府の時代でした。商人として生きる決心をした栄一は、金融・経済の分野で力を発揮して、国立銀行を創設していきます。

ここに紹介した本は、うごめくかたつむりの家に住むことになる物語であったり、捨て子がたどる数奇な物語であったり、政変によって世の中がひっくり返った世の中を生き抜いた人物の物語です。まるで人が生きるといことは、予想もつかない、人智も及ばない不思議な世界と直面することであることをささやいているかのようです。

地球という動く家に住むことを運命づけられている人間なのですから、不思議との遭遇こそが、人生の妙味なのでしょう。

（十文字学園女子大学）